

1920年代における京城放送局 (JODK) の 日本音楽プログラム

金 志善(東京藝術大学)

本発表は、植民地朝鮮における1920年代の京城放送局 (JODK) で放送された日本音楽プログラムを網羅し、分析することで、在朝日本人が享受していた日本音楽の実態を明らかにし、当時のメディアにおいて日本音楽プログラムが有していた意義について考察するものである。

京城放送局は1927年2月16日に開局し、「報道」「教養」「慰安」を原則としたプログラムを編成していた。特に「慰安」放送では、音楽プログラムが最も多く編成されており、漫才、ラジオドラマなども盛り込まれていた。京城放送局は、1933年4月26日に日本語と朝鮮語の二重放送が始まる前までは、単一放送で日本人向けのプログラムと朝鮮人向けのプログラムが交差に編成されていた。

1920年代の朝鮮におけるラジオ登録は約8割が日本人に占めており、音楽プログラムの中においても日本音楽が最も多くを占めていた。これは、当時の朝鮮社会は様々な音楽が混在する中、朝鮮人とともに在朝日本人が共存していた当時の時代性を反映していたこととともに、様々な音楽が様々な媒体によって享受され、形成されていたことを示している。しかしながら、当時を代表するメディアの一つであった京城放送局のプログラムにおいて、日本音楽は最も多くの番組編成を占めていたにも関わらず、あまり関心を払ってこなかった。

以上を踏まえ、本発表では娯楽プログラムの中で最も高い比重を占めていた音楽プログラムに焦点を絞り、特に日本音楽プログラムの実態を明らかにする。当時ラジオが音楽を伝える媒体として形成される過程を捉え、日本音楽プログラムが持つ特徴を明らかにし、どのような意義を持っていたのかを考察する。これについては、主に1920年代の『京城日報』に掲載されている京城放送局 (JODK) ラジオプログラム欄を網羅的に検討することによりその実態を明らかにする。